

Title	ダンテのイタリヤ復興思想
Sub Title	
Author	平塚, 博(Hiratsuka, Hiroshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.1 (1948. 1) ,p.42- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯ルネサンス文化
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480100-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ダンテのイタリヤ復興思想

平 塚 鹿

I 序

ローマ乃至ローマ市國(Imperium Romanum)の追慕と回想が、結局ルネサンス時代にヨーロッパの全精神生活の改造を果した力を擔ふに至るまで、全中世を通じ存在したと云ふ事は、ブルグッハ、ショナイダー、ファイル⁽¹⁾、ゲット等の研究を通しても知られる如く、大體今日一般に承認されてゐる見解であると云ひ得よう。併しシユラムが、「古代ローマ時代は中世にとり、人々が常に其處への復歸に憧れ、又其の復活を希望し、それを促され、努力した理想的時代を意味したと云ひ、又ローマ復活は、單なる一個の希望であつたのみならず、ローマに所有權を有し、或は所有權を有つと信じてゐた凡ゆる人々、即ちローマ人をはじめとし、教王、皇帝、ビザンツ皇帝等が關心を有つた一つの政治的プログラムであつた、と云つてゐる事⁽²⁾は、要するにローマ復活思想(Römische Erneuerungsgedanke)を懷いた者が、必らずしもローマ人に限らず、イタリヤ以外の他の國の人々もローマ思想の擔ひ手となり得た事⁽³⁾を意味し、此の思想が中世ヨーロッパ人一般の共通財産とも稱すべきものであり、元來普遍的超國民的思想であつた⁽⁴⁾事を示す

ものと云くよ。即ち中世のヨーロッパは、尙ほ世界支配の中心と、ヨーロッパ以外の地に考へる事が出來ず、Imperium Romanum の枠内に於てのみ、世界支配を表象し得たのである。斯くてローマは世界支配を表象するものとして、ヨーロッパ諸君主の世界支配的權力設定の目標となり、從つてローマ思想は、ヨーロッパに於ける最强最大の君主が、常に其の現實政治的政策を正當化し、合理化せんとする場合に採用する理論的、精神的根據ともなつた。故に斯る場合ローマ思想は、寧ろイタリヤ國民的思想とは矛盾する結果ともなる可能性があつた。ワルター・ゲツツが、イタリヤ愛國心の前段階をなすものとしてのローマ思想の意義を認めながらも(Götz, Das Werden, S. 31)、此の思想の有つ创造力を寧ろ輕視し、國民的イタリヤ感情の育成にも、將又イタリヤ的國家の創建にも何等決定的役割を演じなかつたとし、寧ろ部分的には、阻止的役割をも演じた」と云つた(Götz, S. 34)のは、上述の如き理由によるものと考へられる。而して更にゲツツが「ローマ思想の結實性は、此の思想が國民的回想と超國民的目標との間を動搖し、二個の相互に反撥し合ふ理念に侍づかざるを得ぬ限り、僅かであつた」(Götz, S. 35)と云つてゐるのは、彼が此の思想に内在する二面性を認め、其處に之が持つ弱點を見出しながら、然も尙ほローマ思想とイタリヤ國民感情乃至イタリヤ國民意識生成との斷ち難き連繫を認めざるを得なかつた事を示すものと云くよ。

而してローマ思想乃至ローマ復活思想が、依然として超國民的性格を帶びる以上、斯る性格が抹殺され、此の思想がイタリヤ國民的回想として、ルネサンスなる新時代打開の意義を獲得する爲には、其處に一種の質的變化が行はれたものと見做さざるを得ない。即ちローマ思想に内在する普遍的超國民的性格を拂拭し、國民的性格を印刻する事である。我々は此のローマ思想よりイタリヤ國民意識生成への過程に於て其の質的變化の媒介としてイタリヤ復興なる思想の存在を見出す、其の理由を我々は次の點に見出し得るやうに思ふ。

元來イタリヤとローマとは別個のものであり、異つた概念であつて、兩者は勿論本來同義語ではない。從つてローマの復興は、現實的には必らずしもイタリヤの復興とはならない。兩者の間には必然的な運命の聯關係がないか

らである。即ち中世に於ては、ローマはよし時に所謂復興せられたる西ローマ帝國の首都として、帝國領イタリヤ (Reichsitalien) に君臨したが、斯る状態は全中世を通じて存在したのではなく、帝國の最盛期をなす比較的短期間にさうであつたのであり、然も斯る時代に於てゐく、帝國領イタリヤなるものは、南伊を含まず、地理的統一體としてのイタリヤ全體を包含するものではなかつた。斯くて中世の大半ローマは政治的現實的關係に於ては、北伊のミラノ、ヴェネツィア、フィレンツェ、南伊のナポリ王國等と並存する一共和都市國家時に或は教會國家であり、又その首都の名であつて、以上の四國とは何等法的根據に基づく從屬關係には立つてゐなかつた。唯ローマがイタリヤに於て一種の優越的地位を占むるものと信ぜられてゐたに過ぎない。即ちローマが占むる優越的支配的地位は、古代ローマ帝國の首都であつたとの傳統に生あるイタリヤ人の信念に基づくものであり、之を或る程度まで補強したものは、ローマが全ヨーロッパ・カトリック・キリスト教世界の精神的宗教上の支配權を握る教皇廳の所在地であつた事である。故にローマは「世界のローマ」であり、又「世界の首都」(Caput mundi) であつて、必らずしも「イタリヤの首都」(Caput Italiae) ではなかつた。換言すれば、宗教的精神的意味に於てのみローマの支配的地位は承認されてゐたが、それはイタリヤの首都としてではなく、寧ろ全ヨーロッパ・キリスト教世界の首都としてであつた。又政治的現實的意味に於ても必らずしも帝國領イタリヤ即ちドイツ王國と別個の存在としてのイタリヤの首府ではなく、ドイツ王國をも含めた神聖ローマ帝國の首府であつた筈である。

斯くして以上の如く見來れば、イタリヤとローマとの間には、必らずしも不可分的從屬關係はなく、兩者を切離して別個に考へる」とも出來、少くとも中世イタリヤ人は、ローマを Caput mundi とは意識しても、Caput Italiae とは考へてゐなかつた筈である。此の事は又十三世紀までのイタリヤ人が未だ確乎たるイタリヤ國民的自覺を持たなかつた事を意味し、「イタリヤ」なるものが漠然と或る地理的概念（それも甚だ不明確な意味に於て）として把握されてゐた事に對應するものである。故に Italia & Roma が一つの斷ち難き聯關係に於て把握され、一個の運命共同

體を形成するのとして、意識的なるは、明かにローマ思想の、イタリヤ國民化を意味するものと見らるじゆ。而してローマ思想のイタリヤ國民化を促した契機⁽¹⁾も、イタリヤを一個の文化的地理的統一性に於て捉く、然も統一なく無政府混亂狀態に在るイタリヤを、嘗ては統一と偉大と榮光を誇つたローマ帝國が、統一的支配者の缺如の爲に墮落せぬの、即ち頽廢せる形式に於けるローマ帝國として把握し、然も之を超國民的即ち無限定的無國境的にではなく、イタリヤ的限界に於て復興⁽²⁾するべし。又斯く確信したイタリヤ復興思想に外ならなかつたと考へる。而して斯るイタリヤ復興思想の最初の把握者を我々は先づダンテに見出しえると思ふのである。而して該思想成熟の契機が、獨帝ハインリヒ七世のイタリヤ遠征に存つたると考く、その必然的聯繫性を眞懸⁽³⁾つゝ、彼のイタリヤ復興思想の構造を探つて見度⁽⁴⁾と取る。

- 註 (1) Konrad Burdach, Reformation Renaissance Humanismus. 1921; Konrad Burdach, Rienzo u. die geistige Wandlungen seiner Zeit. (Vom Mittelalter zur Reformation II); Fedor Schneder, Rom u. Romgedanke ein Mittelalter. Die geistigen Grundlagen d. Renaissance. 1926; Elisabeth Pfeil, Die fränkische Romidee des frühen Mittelalters. 1929; Percy E. Schramm, Kaiser, Rom u. Renovatio I. II. 1929; Albert Brackmann, Der „römische Erneuerungsgedanke“ u. seine Bedeutung für die Reichspolitik d. deutschen Kaiserzeit. 1932; Walther Götz, „Renaissance u. Antike“ (Historische Zeitschrift CXIII, 1914); Do, Das Werden d. italienischen Nationalgefühls. 1939.
- (2) Schramm, I. Einleitung.
- (3) Pfeil, Einleitung. 「ハルスのゲルマルト及びホットウ川輦の如きが北方より來つてローマ精神を得」、其の偉大なるネサンスの大道を切り拓いた人々の仲間には「いた」所々。但しアラックマンはローマ以外の他の政治的諸權力に於てはローマ思想乃至ローマ復活思想の如きが文學の領域を超えて現實政治の上に決定的感化を與へた事なしと主張し得る。(S. 31)
- (4) Götz, Das Werden. S. 35. ローマ思想は普遍的なものに通ずる危險を有す、教會が擴張教會的ローマ思想を目標とする處は帝國的超國底空氣である。

II 復興あるべきイタリヤの原初的理理想國としてのローマ帝國

ダンテは終生イタリヤの復興と救濟とを念願し、然も之が彼の存命中に實現するべき事を熱望して口となかつた。然らば最後まで斯くもその實現の可能性を信じて疑はなかつた根據は如何なる點に在つたのであらうか。

彼は「神曲」の目的が、「此世に生ける人々を悲惨の状態より脱せしめ、彼等を幸福の状態に導くに在る」(Epistola X 267-270)と云つてゐるが、之は單に「神曲」にのみ止まらず、殆ど彼の全著作に就いても云ひ得るものであつて、彼畢生の念願は結局世界平和の實現によつて人類が至福の生を營み得る事であつた。正しく世界平和こそ人類の文化生活窮極の目的實現の爲の第一要件である(De Monarchia, I. 4)。併し地上に於ける此の世界平和の樹立は如何にして可能であらうか。彼は宇宙が、それ自身は永遠に不動で然も他のものは之を愛慕する事によつて動かされる窮極的な精神的實在、非物質的原理たる請火天(Empireo)を中心として段階的に統合され、秩序づけられ、斯くて一切の天はその末端に至るまで之に據つて整然たる運動をなす構造である如く(饗宴第四編第一章 Convivio IV, 1)、此の全宇宙に對し相對的な一部をなす人類の世界も亦、以上の宇宙構造の原理に合一するを以て最上至美の状態と考へる。即ち神の意志は一切の被造物が自己本來の性質の許す限度まで神的類似を示現すべき事に在り、斯くして神的統一に最も類似した唯一の君主による帝政的統一に於てこそ、人類は最も良く統制される(De Mon. I. 9. 8)。斯くの如くダンテは人類社會が唯一の帝政によつて統制されるべき事を、宇宙構造、神的原理より先驗的に演繹論證すると共に、又皇帝權が社交的動物たる人間本來の性質よりして、至福の生を營み市民としての生存の爲に必要不可缺のものたる事を主張してゐる。即ち人間共同生活の最小の單位たる家庭より都市更に王國に至るそのいづれの段階に於ても、結局不和、戰争が避け得られず、斯して一切のものを所有するが故にそれ以上を欲せぬ Monarchia 即ち一人の君主を有つ單一の君主國家 (uno solo Principato e uno Principe) (單一最高の君主たる皇帝の支配) に於て、はじめて世界に平和が保

たれ、こゝに於て人は生の本來の目的たる幸福の生を營み得ると説くのである。(Conv. IV. 4)

唯一の帝政の存在に依つてのみ人間の至福の生は完全となると云ふ以上の見解は、同様の趣旨を述べた「帝政論」第一篇第三章以下第七章迄特に第五章に照應し之と相聯繫するものであつて、此處でも結局世界の安寧の爲には單一の支配權即ち Monarchia 乃至 Imperator (皇帝) によつて統治される Monarchia 乃至 Imperium (帝國) がなければならぬと主張し、然も此事が人類史上顯著な出來事即ち有史以來未曾有の完全な帝政の出現を見たアウグストゥスの治世に於ける世界的平和とキリストの誕生によつて立證される、と云ひ第一篇を結んでゐる。斯くて凡ゆる角度より帝政の必要を考察し論證した「帝政論」第一篇は、要するに入類共同生活の理想的存在様式、即ち當爲としての國家の存在様式を規定したものに他ならない。

而して第二篇は全篇すべて斯る國家が歴史的現實として嘗て存在し、それが他ならぬイタリヤを中心とするかのローマ帝國であつた事を論證したものである。即ち彼はローマの創建と其の帝國的發展が、暴力に據らずして神の聖旨に基づき(Mon. II. 1)、それは奇蹟によつて證明され(Mon. II. 4)、またローマ人が世界帝國を保持し得る權利を所有する所以は、正義の實現を目指す彼等の公共精神に示された精神の高貴さによる事を詳述論證し(特に第三章より第九章)、「おゝ尊き人民よ、汝光榮あるアウソニヤ(イタリヤ)よ、汝の帝國を萎微せしめし者が、決して生れざりしか、彼自らの敬虔なる志により誤られざりしならば宜かりしものを」(第十三章)の語を以て第二篇を結んでゐる。此の結語は「帝政は果して世界の安寧の爲必要なりや否や」との「帝政論」第一篇の主題をうけての第二篇の主題「ローマ人民は正常に帝政の職能を擅有し得るや否や」に對する結びの言葉として重要な意味を有つものと考へられる。即ち之は彼の考へる理想國家が、神意に基づく歴史的國家としてのローマ帝國に於て實現され、然も此の帝國並びにその民が現在のイタリヤと不可分的な血縁的連續關係に在り、而して此の國家は未だ亡びず、たゞ衰頽墮落の状態に在るとの解釋と咏嘆とを示すものと解せられる。

斯の如く彼はイタリヤの最盛期をローマ帝政時代に認め、此處にこそ人類が齎んだ唯一の完全なる地上的國家生活が存在したと考へるが故に、彼の時代のイタリヤの現状態を以て嘗ての偉大と光榮とを誇る時代よりの墮落と觀じたのである。從つて之を慨嘆する彼の胸底には常に平和と力と世界的名聲とを誇つた偉大なるローマ帝國が存在し、地上的國家の理想的原型として輝かせ、之が絶えず對比されつゝあつた。即ち當時のイタリヤの奴隸狀態は、人類一般が在るべき一般的狀態に未だ達せざる狀態と云ふよりも、彼が理想化し抽象化したローマ帝國なる國家的規範に於て一應完結した正義と秩序に基づく人間の共同生活が、之を物心兩面より統率すべき眞の指導者の缺如により、墮落した狀態と考へられたのである。此の意味に於て古代ローマ帝國は彼の把握するイタリヤ墮落觀の前提となすものと云ふ事が出來よう。

(一) ダンテ全著作のテキストとしては E. Moor, *Tutte le opere di Dante Alighieri* (Oxford Dante) を用ひ、テキスト及び翻訳をした W. W. Vernon, *Readings on Paradiso of Dante* 2 vols. *Readings on Purgatorio of D.* 2 vols. *Readings on Inferno of D.* 2 vols. を第 1 とし Temple Classics による獨翻を以て Philalethes, 3 Bde, K. Witte, 3 Bde 及び「愚曲」のテキスト及び翻訳をした T. Casini-Barbi による Scartazzini-Vandelli を用いた。

III ダンテのイタリヤ墮落觀

ダンテは彼の時代のイタリヤを以て秩序と平和なも悲惨な頽廢墮落の狀態に在るものと觀じた。彼のイタリヤ復興に対する熱望は、あたかも奴隸狀態に在るとの現状の認識から生れたものに他ならない。從つて我々は彼の把握するイタリヤ頽化現象の分析より考察を始めねばならない。之に關する叙述は、彼の著作の到る處に見出されるが、特に「神曲」煉獄篇第六歌(Purgatorio VI, 76-151) に於て、彼が披瀝した長い慨嘆の言葉^(一)は、彼の解するイタリヤ奴隸狀態の綜觀的叙述と見做されるであらう。

その内容を検討分析すれば七六一八一行は皇帝と教皇なきイタリヤが、今や諸國の上に超然として之を冠する指導的王者の地位より、最劣等の悲惨な奴隸的地位に陥落した事を述べたイタリヤ現代に就いての總括的序論と見る事が出来る。斯くてイタリヤの墮落頽廢は、次の如き諸相を呈示する。

(一)全イタリヤに亘る戰亂狀態の存在、即ちイタリヤ各都市内部並びに各都市相互間の不斷の激烈な對立抗爭(一七八七)。斯の如き鬭争の根源をなすものは、ゲルフギベリン黨争であり、之が全イタリヤの平和を攪亂するものとダンテは考へる⁽²⁾。(二)全般的法制の頽廢、法的規制力の弛緩(八八一九〇)。(三)教權による皇帝權の篡奪(九一十九六)。(四)皇帝等(ルドルフ及びアルベルト)の職務怠慢(九七一〇五)。(五)皇帝の怠慢によるゲルフィ貴族の壓制とイタリヤ貴族主としてギベリーニ貴族の窮乏(一〇六一一一)。(六)帝國の首都ローマに於ける皇帝の不在(一一一一一四)。(七)皇帝權威並びに聲望の失墜(一一五一一七)。(八)各都市に於ける獨裁的專制君主(tiranno)の群立(一一四一二五)。(九)下層階級者の徒黨結成と上層階級者に對する反抗(一二五一二六)。(十)フィレンツェ並びにフィレンツェ人の腐敗墮落(一二七一一五一)。(1)下賤なる者の私鬭參加と公職の占有、(2)不正偽善の行爲、(3)旺盛なる利己的權勢慾(4)不正利得による國富増大、(5)黑白二黨の争による不斷の戰亂、(6)頻繁なる法律、貨幣、慣習、官吏の更新による國內混亂の助長、等である。

以上ダンテが指摘し慨嘆したものは、固より彼が解するイタリヤ墮落相の一切を盡してはゐない。即ち更に淳風美俗、道德律の弛緩頽廢、フランス的ナポリ勢力のイタリヤ浸潤、ナポリ國王及びフランス國王と教皇廳との反帝的結合提携、の如きを付け加へねばならぬからである。併し之等は教皇廳乃至ローマの墮落或は又フィレンツェの墮落と聯繫ある性質のものと見做す事が出來る。さて以上列舉したイタリヤ墮落の諸相に就き個々別々にダンテの解釋を詳細に紹介する煩を避け度いと思ふ。何故なら之等の墮落相は結局或る中心的本源的な墮落に由來する派生的現象に外ならないからである。然らば斯る中心的本源的な墮落とは如何なるものであらうか。我々は之を教皇廳並びに皇帝權

の墮落を體現するローマの墮落及び之と不可分關係に在る反帝的ゲルフ勢力の大中心たるフィレンツェの墮落に見出し、之等兩者の墮落こそイタリヤの墮落頽廢を代表する模範的なものと解する。従つて以下我々はイタリヤ墮落の典型としてのローマ並びにフィレンツェ、更に淳風美俗の頽廢の三項目を探り上げ、之等につき考察する事によつて、ダンテのイタリヤ墮落觀の性格を解明し度いと思ふ。

註

(1) 本文引用略す。

(2) 同様の見解は天國篇にも見出される。即ち此の黨争を以てイタリヤの不幸の原因として激しく非難すると共に、佛王と結托し皇帝に反抗するゲルフィも、黨派的目的の爲に帝國の名を利用するギッベリニモ、共に神聖な旗(帝權を象徴する鷲を描けるもの)に謀叛するが故に同罪であると云ふ (Par. 31-, 57-111)。

(a) イタリヤ墮落の典型としてのローマ

ダンテが把握した上述の如き多様なイタリヤ墮落の諸相は、相互に何等の聯關係もなく偶然且つ各個別的に發生した性質のものではなく、本源的墮落に淵源することにより、互に斷ち難き內的相關關係に在る性質のものであつた。斯る本源的墮落を、彼は次の如きものに見出してゐると考へられる。即ちヨーロッパ・キリスト教世界の精神的元首たる教皇による俗權の篡奪、併有、並びに己が常住の地たるべきローマを去り、イタリヤを放置し不斷の戰亂無秩序に陥らしめた皇帝の職務怠慢である。蓋し教皇及び教會の腐敗墮落は必然的に一般聖職者のそれを導くと共に、當然一般民衆の道德律低下、倫理觀念の低俗化を促し淳風美俗の頽廢を誘發したからである。又教皇による皇帝權篡奪の企圖こそは、全イタリヤを不斷の禍亂に捲き込み、フランス系ナポリ勢力のイタリヤ浸潤を可能にした原因に他ならぬ。又皇帝が固有の職責を全うせず、帝國統治の中心を去り現世統治の大權を行使しなかつた事は、皇帝の權威並びに聲望を失墜すると共に全般的法制の頽廢となり、法的規制力の弛緩を來し、其の結果イタリヤ各都市内に於て獨裁的統治が行はれ、小專制君主等(tiranni) の發生群立を促したからであつた。されば煉獄の一靈マルコ・ロ

マルコベルトが世界墮落の原因を食慾なる教會の皇帝權篡奪企圖、従つて政教兩權の混淆抗争による兩者の墮落に歸し（一）、「汝若し己を信せば穗を見よ、凡ての植物は種によつて識られる」と云つたのに對し、ダンテは「我がマルコヨ、汝良くも論せり」（Purg. XVI, 97-130）と答へてゐる。而して彼の此の答は、世界墮落の原因が政教兩權の混淆であり、其の結果を示す最上の證據が悲惨なイタリヤの現状であることを肯定した意味のものに他ならない。正しく政教の争いとは結局全イタリヤをゲ・ギ兩陣營に分ち、救ふ可からざる深刻な分裂紛亂の種を蒔いたものであつた（特にフィレンツィに於て、Par. XVI, 58-63）。

而して政教兩權の混淆を以て世界墮落の原因と認めながら、然も世界墮落の實相をイタリヤ（特にロムバルヂヤ地方）の慘狀によつて呈示してゐる事は（Purg. XV, 113-123）イタリヤの墮落を以て世界の墮落と解するダンテの思惟過程を示すものと云ひ得る。

ローマはダンテにとり本來世界統治の首都として豫定され（De Mon. II, 7⁵⁹-60）、その運命は神の特別の恩寵を受ぐべか對象であつ（Conv. IV, 5¹⁷⁶⁻¹⁷⁹）。皇帝の座（Imperi sedes, 'De Mon. III, 10⁴, Conv. IV, 5³⁰⁻³², Ep. VIII, 10¹⁵⁰⁻¹⁵²）にしておな「イタリヤの首府」（Latiale caput, Epist. VIII, 10¹⁵⁰）であつた。然も同書は聖ペトルスはじめ多くの殉教者達の血を以て聖別された（Epist. VIII, 2²¹）教皇の座（sedes apostolica, Epist. VIII, 2²⁶, 11¹⁷⁵; Purg. XVI, 1²⁷; Epist. VII, 7⁵⁴; VIII, 2²⁶, 10¹⁴, 11¹⁵）に詰められた都（altria urbs, Epist. V, tit.）であつた。すれば皇帝並びに教皇の座處（11¹¹）の太陽の輝く處（Purg. XVI, 10⁶⁻⁷）として、全イタリヤ人特にその城壁内に住む人々の尊敬と愛とを受くるに價（Epist. VIII, 10⁴⁸⁻⁵²）。従つて、城壁の石塊すらローマが存立する地と共に最高の尊敬を受くべかのであつた（Conv. IV, 5⁸⁰⁻³）。

然るに現實のローマは如何。皇帝に見棄られ（Purg. VI, 112-114, Ep. VIII, 41¹⁰）次いで教皇にも去られて今や一つの光明を失ひ（Purg. XVI, 10⁶⁻¹⁰⁷, Mon. III, 1³⁶⁻³⁷, Ep. VII, 10¹⁴³）。人々にベルトへ憐れみを催すほど悲惨な狀態を

現出してゐるのである(Ep. VII, 1043-144)。斯てダンテはローマが皇帝及び教皇の都としての資格を既に喪失したものとし、其處はローマの墮落を認めてゐる。

併しローマ墮落の一斑を擔ふ皇帝の罪が世界統治の首都放棄といふ寧ろ消極的な方面に在るに反し、教皇側の罪はローマに常任しながら自らの腐敗墮落によつて之を世界墮落の淵源の地たらしめた積極的な方面に在つたのである。従つてダンテは種々の策謀によつて俗權によつて俗權の獲得に腐心し帝國の正當固有なる統治權を妨害せんとする教皇其他聖職者等を痛烈に非難し、彼等を貪慾の罪を以て地獄に顛落せしめ、假借なき業火に焼いてゐる(Int. VII, 40-51, XIX, 1-120)。まことに彼がその著作特に「神曲」に於て、最も多くの言葉を費し最も激しく非難したものは、聖職者の貪慾による腐敗墮落に就いてであつた⁽²⁾。此事は彼がイタリヤ頽廢現象の最たるものとして、且つ又其の根源をなすものとして之を最も重視した事を示してゐる。而してその元兎とも稱すべき者をダンテはボニファキウス八世と考へ(Int. XIX, 52-57, 66-87)。彼が當時一般に要望されてゐた聖地回復の企に冷淡であつたのも、結局惡魔の創建になるフイレンツォ市⁽³⁾の金貨流通に腐心した貪慾の爲であつたと解してゐる(Par. IX, 24-26, 137-138)。尙ほ斯る宗教界高權威者の墮落は、宗教界全般にも波及せざるを得ない。ダンテは斯る現象を教會教父等、修道院、各種の教團、説教者、神學者等に認め、其の醜状を暴露してゐる⁽⁴⁾。

以上の如く彼の時代に於ける宗教界全般に亘る腐敗墮落相の瀰漫を目撃したダンテは、之等聖職に在る人々こそ「世界の最も墮落せる者達」(la gente ch' al mondo più traligna) (Par. XVI, 58) であると斷言したのであつた。然も彼等こそは一般大衆の精神生活倫理生活の指導に與るべき人である。故に使徒殉教の地として最も神聖なるローマが墮落せる教皇の居處となり、金錢による免罪券の賣買地「日本クリストが賣られる處」(Par. XVII, 49-50)となつた事は結局ローマそのものゝ墮落を意味するものでなければならぬ。然も一方俗權篡奪を企圖する教權の挑戦により、帝權が遂にローマに帝座と帝權の樹立をなし得なかつた事、即ち元來世界を照らすべし日の太陽のうち、一方が地獄

蔽つてアヘナ事は、教權の墮落であると共に、政權そのものも墮落でもなければならぬ。ダンテが所謂コンスタンティン帝の贈與を以て、政教兩權墮落の始まりと解し、教会に對し帝の本志を誤解したものとして警告すると共に帝權に對しても之を遺憾としてゐるのも(Inf. XIX, 115-117 及び帝政論第二篇第十三章) 要するに以上の如き事由に基づくのである。斯く見來れば、ローマこそは世界乃至イタリヤ墮落の大中心たるのみならず、俗世統治の職務を擔ふべき世俗的君主權墮落の根源でもある。故に之は物心兩面の意味に於て、ローマの墮落と云はねばならない。

斯くて世界帝國の首都にしてイタリヤの中心たるローマの墮落こそは、ダンテにとりイタリヤ墮落の典型を示現するものであつたと云ひ得るであらう。

註 (1) 「法律は在る、されど之に手を置く者(法を遵守する者)は誰ぞ、何人も無し。そは先き立つ牧者(教皇)は能く反芻するも(神の法を斷えず口に論するが)、その蹄は裂けざるが故なり(俗權と教權とを分離せず、兩者混淆す)。かくて民は己が執心の財貨をおのが牧者もまたひたすら志すを見、之のみ喰つて他を省みず、惡しき導きこそ世界を罪あるものとせし原因にして心墮したる汝等の性に非ざることを汝は良く識り得ん、良き世界を善く作りしローマは、常に二つの太陽を有ち俗世と神の途いづれをも指し示せり。その一は他を滅ぼし劍は牧杖に結ばる。斯くてともどもに烈しく惡に走らざるを得ざりき。蓋し結ばるや互に他を恐れざるに至りければ。汝若し余を信ぜずば、穂を思ひ見よ、凡ての植物は種によつて識られるが故に。……語れよ汝此の先ローマの教會、一つの政を一身に混淆し、爲に泥土に倒れ、口が擔ふものを汚さん」と(Purg. XVI, 97-129)

(21) 邪惡なる教皇等の惡例が地上の君主等を迷はす事のないやうダンテは在天の正義の諸靈を通して神に祈る(Par. XVIII, 115-136)。又教皇教會の貪慾と墮落につき聖ペトルス(Par. XXVII, 22-34)、聖者ペトルス・ダミアニ(Par. XXI, 18-20, 130-135)も烈しく非難し、斯くて天國に於てペトルスが賄賂と詐欺により教皇位を篡奪したボニファキウス八世の貪慾と惡行とを難詰するや、在天の諸靈悉く激怒し、バアトリーチェにも憤激して頬を紅潮する(Par. XXVII, 22-34)。

(22) 教會の教父達に對する非難は、抒情詩人フォルコによつて(Par. IX, 124-142)、又修道院及び教團の墮落に關してはその創設者たる聖ベネディクトゥスに藉口して語られ、その墮落狀態は奇蹟によらねば改善し得ぬ程であると嘆ぜられる

(Par. XXII, 73-96, Cf. Vernon, Par. II, p. 207-212)。マハムナキア派教團の腐敗墮落については同派のボナヴェンチアの靈が(Par. XII, 112-120)メメリコ僧團のそれについでペトルス・ダミアニの靈(Par. XXI, 18-20)及びトーマス・アクイナスの靈が概嘆し、その世俗的富と權勢とを追求するに至つた貪慾を難詰してゐる(Par. XI, 124-136)。尙ほ説教者と神學者の墮落はベアトリーチェが語り(Par. XXIX, 85-126)、特に何等の權威、根據もない免罪券の賣却により私腹を肥す事に對し痛罵す。

(b) イタリヤ墮落の典型としてのフィレンツェ

上述の如くダンテにとりローマの墮落はイタリヤ墮落のモデルを示現するのであつたが、彼にとり同様の意味を有つたものは彼の郷土フィレンツェである。蓋し同國は教會勢力の物的・一大支柱として教會の俗化、教會の政權簒奪に重要な役割を果すと共に、イタリヤ騷亂の基をなすゲルフ、ギベリノ黨争を激化しに元兇として、ローマ墮落の原因の一斑を擔ふ者であつたからである。

従つてダンテは彼の郷國であるにも拘らずフィレンツェの墮落に就き口を極めて之を痛罵してゐる。但し彼は同國が最初より低俗頹廢せる郷土であつたとは考へない。否寧ろ素朴にして然も汚れなき平和の生活を享受した往時の生活が、彼の時代に至り墮落したものと考へてゐる。神曲「天國篇」第十五歌に於て彼の祖カッチャグイダが、往時に於けるフィレンツェの素朴にして平和に充ちた生活を謳歌したのは、同時に之と對照的に現在のフィレンツェ市民の生活の華美・輕佻・浮華を慨嘆せる意味のものであり、勿論ダンテ自身の解釋するフィレンツェ墮落相の解明に外ならない。

即ちカッチャグイダの時代フィレンツェは「慎ましくも汚れなき平和のうちに暮らし」(si stava in pace, sobria' e pudica) (Par. XV, 100)、彼が呱呱の聲をあげたのは「斯くも安らかにして美はしき市民生活、斯くも誠實な市民社會、斯くも樂しき箱」に於てであつた(130-133)。然るにダンテの時代のフィレンツェの市民生活は、之と全く正反対であると解れる。彼は同國の墮落を次の諸點に見出してゐる。即ち(1)不斷の分裂黨争(一)、(2)公私の市民生活に於ける贅澤、浮華、輕佻(Purg. XXXIII, 94-111, Par. XV, 100-108)、(3)家庭的勤勞精神の弛緩(Par. XV, 115-129)、(4)山師的根性の擡頭(2)

(118-120) ⑤對外戰爭による國家領域の擴大に伴ふ多數近隣他市民の移住混入(Par. XVI, 49-69, 132-135)。⑥加蘭の黨派(Par. XVI, 49-57, 67-69)。⑦舊慣習法律の頻繁なる改廢と共に伴ふ秩序の混亂等(Par. XVI, 46-154)。

而してフイレンツィアが被つた凡の恐るべく災禍の原因は政教の争に端を發する激烈なゲルフ、ギブリン乃至黑白二派の黨争(Par. XVI, 133-147) 及びフイレンツィエ市 の急激な發展と共に伴ふ新來移住民の混入に歸せられてゐる。

斯くてフイレンツィアの惡名は地獄より蟲か。その市民は貪慾、貪婪、嫉妒、傲慢の民(Inf. XV, 61-68 *ingrato popolo maligno gente avara, in videosa e superbia*) であると詛われ。從つてダンテは彼が住むべく郷國が、「臣々善から遠れかり、悲しむべく滅びる運命に在る」が故に、長く生き存らへるよりも早く死に度いと願ふ程である(Purg. XXIV, 76-81. ヘンリヤの間に對する答)。併しながらダンテが最も痛烈に非難し慨嘆したのは、對外政治上に於けるフイレンツィアの態度であつた。即ち同國がイタリヤゲルフ勢力の大中心として教皇廳及び教皇特にボニファキウス八世と、從つてナポリ王國と結び、皇帝のイタリヤ支配に反抗した事である。彼は之をフイレンツィアの貪慾に由來するものとし、其の反帝的態度により同國墮落頽廢の動かし難い證據を見出さんとしてゐる。即ちフイレンツィエ市の經濟的發展の基礎をなす教皇廳との經濟的政治的結合により、大なる流通と國際的名聲とを獲得した同國の貨幣フロリン貨も、彼にとつては「呪々々花」(il maledetto fiore) (Par. IX, 130) と解されたのであつた。併し斯る見解が最も顯著かつ明確に表示されてゐるのは、獨帝ハインリヒ七世のイタリヤ遠征に際し、彼がものした三書簡中特にフイレンツィエ市民宛のものとハインリヒ宛のものに於てである。即ち前者に於ては、貪慾の故にフイレンツィアが神の法と人の法とを犯し、又自由の軛を嫌つて、當然負ふべく服従の義務を拒み、皇帝に對し叛逆の舉に出たと難じ(Epistula VI, 26-35)。同市民は邪惡では協調し、驚くべく貪慾により畜生となつたもの(O male concordes! Omnia cupidine caecati! Ep. VI, 78, 79)、又本性上及び邪惡によつて錯亂するトスカナ人中最も虚榮心強き人々(Tuscorum vanissimi, tam natura quam vitio insensati. Ep. VI, 141-142)、或は「人類のうちの最も參たるもの」(miserrimi hominum. 86) と詛謔される。

又後者に於ても同市は皇帝に對する叛逆の根源、イタリヤ騷亂の本據と考へられ、或は有毒九頭の怪蛇に(EP. VII, 114)、恐るべき疫病(142-143)に、或はダヴィデに刃向ふ巨人ゴリアテに喩へられる(178)。而してゴリアテ(フィレンツェ)の打倒によつてイスラエル人(イタリヤ人)は救はれるであらうとする(183)。斯くて彼の解釋ではフィレンツェこそイタリヤに戰亂と邪惡頽廢を齎した根源となるのであり、正しくローマと共にイタリヤ墮落頽廢の典型でなければならなかつたと云へよう。

(一) フィレンツェに於ける不斷の黨争と戰亂に關してはダンテ自身が其の直接の被害者であるため痛切にその非を認め、著作の到る處に於て之に言及してゐる、その若干の例は Inf. XIII, 143-145 の外、ヴァンニ・フッチの豫言(Inf. XXIV, 143-151)チヤッコの豫言(Inf. VI, 49-75)、カッチャグイダの豫言(Par. XVI, 67-69, 88-154)に見られる。

(二) フィレンツェ婦人の風俗頽廢に關する煉獄一靈の豫言(Purg. XXIII, 98-105)。彼は同市女達の不貞について語る(94-96)。又カッチャグイダはダンテ時代の同市の女達の虚榮心、贅澤、市民の浪費、家庭の女達の勤勞、簡易生活に對する嫌惡、更に一般市民の射撃心強きを非難す(Par. XV, 100-123)。

(e) 淳風美俗の頽廢

煉獄の一靈マルコ・ロムバルドは世界の墮落に就いて慨嘆する(Purg. XVI, 58-129)が、之を聞くダンテも肯定して、「正しく我に汝が叫ぶ如く、世界は一切の徳に見棄てられ、重く惡徳に蔽はる」と云ひ、マルコはその原因が人間の無垢なる魂を正しく神に導くべき制御としての法律と、之を行使する嚮導者(王乃至皇帝)の現在せぬ事、更に教皇が俗權の擅有によつて惡例を人民に示した爲、たゞ法律はあつても之を運用する者が居ないからであると云ふ。即ち結局世界墮落の原因是、遊星(諸天)或は人間の墮落にあるのではなく、世界の悪しき指導即ち悪政に歸せられる(Purg. XVI, 85-105)とする。

以上の問答によつても明かである如く、ダンテは彼の時代が道徳的に墮落してゐるものと觀じたのであるが、此處で彼が *Il mondo*(世界乃至現世)は、マルコの憤慨が一切イタリヤの墮落に關してのみ云はれてゐる事實より考

へ、普遍的な世界全般ではなく個別的なイタリヤそのものを指すものと解せられる。蓋し才に素察した女くイタリヤを以て世界の中核と解するダンテの根本觀念よりして彼がイタリヤを以て世界を代表したものと解すべきは當然であるからであり、従つて「汝等」(Voi)は「イタリヤ人」と解すべきであると考へる。

而して事實ダンテは殆ど全イタリヤに亘りその道德的墮落に就いて語つてゐるのである。

(一) 北伊ロムバルヂヤ地方の墮落(Purg. XVI, 115-128)

(11) トスカナ地方の墮落(Purg. XIV, 29-54)、同地方出身グイド・デル・ドゥカの亡靈によるアルノ流域諸市に對する痛罵。同地方住民が道徳を蛇の如く敵視して之を驅逐し、原初の徳を失つたと云ひ、アルノを動物の如き人間の住む處として「獸の河」(fiero fiume)と呼び、之等諸市の住民を動物に比してゐる。特にフィレンツェの住民(特にゲルフイ)(49-51, 58-61)は貪慾なる狼に喰べられ、また同市長による反対黨の殘虐なる殺戮追放處置を指摘し、同市は血に染む悲しき林(*la trista selva*, Purg. XIV. 64)であり、狼どもの巣窟であると云ふ。

斯くてダンテは彼の時代のイタリヤ全體が殆ど精神的倫理的方面に於ても墮落してゐた事實を認め、ベアトリーチエをして「斯くて地上に大いなる愚昧が增長し、遂に何等の根據もなしに人々が、如何なる約束にでも群がるに至つた」と嘆かしめたのであつた。併しながら斯る精神的倫理的方面に於けるイタリヤの墮落に就いて、ダンテが特に強調してゐると考へられるのは、之等の惡徳のうち貪慾が著しく優位を占めてゐるかに考へられる事實である。我々は此の事實を特に指摘せざるを得ない。蓋しダンテは貪慾を以て制御されざる欲望と觀じ、之を政治的社會的害惡の根元と考へてゐる。凡ゆる處に瀰漫せる惡徳なる貪慾は、人間の愛情をして朽つべき富に向はしめ、爲に驚くべき天の秩序と配合を見上ぐる眼を晦ますと非難せるベアトリーチエの言葉(Par. XXVII, 121-128)は、勿論ダンテの根本思想と見做し得る。従つて彼がイタリヤ救濟に殆ど唯一の期待をつないだかのハインリヒ七世が、之を成就し得なかつた理由を、彼は全イタリヤ人が、餘りに貪慾に盲目となつた事、特に教會の指導者たる教皇等のそれに歸したのであ

つた（バアトリーチェの説明、Par. XXX, 136-144）。即ち自らが餓死するのも識らずに自分の乳母を逐ひやる嬰兒にイタリヤ人を譬へ、彼等は貪慾に目が眩み彼等の救濟者を迎へ入れなかつた爲となすのである。我々は此の非難が主として、ゲルフ・ギヤクラシ一及び教皇黨、特にハインリヒに對する反対最も頑強じあつたフィレンツェ人に對するものとす（Cf. Vernon, Por. II, p. 449-450）カシニ一及びスカルタツィーリ（Scartazzini-Vandelli p. 950）の解釋に賛成し度い。何故なら上述の如く、同國人は「驚くべき貪慾により盲目となつたもの」（Ep. VI, 78-79）にあり「貪慾の民」（gente avara）と刻印され明かに貪慾を象徴する狼を以て譬へられてゐるからである（Purg., XIV, 45-51）（イタリヤ墮落の典型としてのフィレンツェの項参照）。

斯くして「帝政論」及び「饗宴」に於て、人類共同生活の理想的な存在様式が理論的に規定されると共に、他方イタリヤ墮落の現實相が暴露され其の由つて来る根源が究明されたものとすれば、即ち彼が之を肯定する理想國家の原型——現在のイタリヤと血縁的歴史的連續關係に在りと解された古代ローマ帝國に於て——と、彼が之を否定するイタリヤの現實が明示されたものとすれば、彼が志向するイタリヤの進むべき途、而して其處にこそイタリヤ救濟復興の可能性が横たはる途は自ら明かとなるべき筈である。而して我々は以上の考察に於てダンテにとりイタリヤ墮落の根源をなすものは、ローマとフィレンツェの墮落に於て示現されるものであつたとの結論に一應到達した。然も彼が教皇廳並びに教皇の墮落と皇帝の職務怠慢によつて代表されるローマの墮落を痛烈に非難し、又フィレンツェを惡魔の都としてその打倒を叫んだのは、教皇教會の廢止絶滅ではなく、その淨化廓清、悪教皇の驅逐、現教會の質的變化を望んだ意味のものであり、又フィレンツェ共和国の滅亡ではなく、同國の質的變化と更生とをこそ望んだ意味のものであつた。否寧ろ此の點にこそダンテは重大なる意義を認めてゐたものと考へられる。即ち皇帝のローマ復歸によるローマ教會の廓清淨化と反皇帝的親佛的フィレンツェ共和国の性格變化乃至皇帝への同國の屈服と協力、要するに皇帝的教皇的ローマの復興と、フィレンツェの更生こそイタリヤの救濟復興にとり、不可缺の前提なりと考へられたのではなかつたらう

が。併し我々は斯る推測の蓋然性を更に一層固めむ爲に 復か直擧未止したイタリヤ復興、おもに西アラスティアの事例を具體的内容を検討して見度い。

IV イタリヤの救濟復興に對する熱望

イタリヤの救濟と復興に對するダンテの願望は、彼の著作の諸處に散見する事實であつて、之等の著作が彼の全現實生活、精神生活の記錄とすれば、彼は數奇なる生涯を通じ不斷に之を熱望した事が想像されるのである。斯る熱望を暗示し乃至は明示した章句中特に顯著なものと指摘すれば、次の如くなるであらう。

(1) 神曲地獄篇第一歌イタリヤ救濟者としての Veltro(獵犬) 出現に關する神祕的豫言 (Inf. I, 101-106)^{*} 卽ち惡獸(特に牝狼)を邑々より驅逐し、慘しきイタリヤに救ひを齎らすであらうの救濟者、ノルトロとフルトロとの間に生れ、智と愛と猛き心とを糧とし、國土や金錢の如きを食はぬ獵犬(il veltro) にて多分に象徴的神祕的な豫言をなす。

* 「……彼は低きイタリヤの救ひとなるのであらう」(Di quell'umile Italia fia salute) (Inf. I, 103-106) 向此の「獵犬」は「神曲」天國篇がダンテにより捧げられた北伊ヴロナの君主カン・ヘルント・ホラ・スカラであるとは大體諸學者の一致した推定である。勿論ドイツ皇帝ハインリヒ七世とする者も若干ある。

(1) 煉獄篇最終歌に於て五百十五 (DXV) なる數字を以て示される救濟者的人物の出現に對する確信的期待と希望 (Purg. XXXIII, 34-63)^{*} 地上天國に於けるダンテの眼前に展開された教會と國家の運命に關する一種の象徵劇に於てベアトリーチェの語る豫言、即ち彼女はやがて神より派遣された世界救濟者的人物が現はれ、頽廢せる邪惡な教會に鐵鎌を下し、教會墮落の禍因たる佛王との不義の結合を破碎し、之を淨化廓清する事により世界並びにイタリヤ頽廢墮落の禍根を一掃するであらう、との確信に充ちた希望的豫言をなしてゐるのである。即ち「凡ての抵抗と凡ての防

晴に闇れず星が既に近づいて時を我々に齎らし神より遣されし『五百十五』(un cinquecento dieci e cinque, Messo di Dio)が女賊(邪悪な教皇)並びに之と不義をなす巨人(佛王)を打ち滅すであらう*」⁴⁵⁾(Purg. XXXIII, 43-45)。

* 炼獄篇第二十八歌より第卅三歌に及ぶ默示錄的幻想に於ける象徴と豫言の解釋に關し詳細な研究は E. Moor, Studies in Dante, Vol. III, p. 178-283. 參照。

尚ほ、大類博士「ルネサンス文化の研究」参照。

(iii) ドイツ國王ハインリヒ七世のイタリヤ遠征の際書かれた三通の書簡に於けるイタリヤ救濟復興の熱望。

(a) イタリヤの王侯並びに人民等に宛てたもの(書簡第五)。第一節に於てはハインリヒの來伊を以てダンテが久しく待ち望んだ慰藉と平和の徵が見える絶好の機會であり、久しい間の災厄の暗黒を一掃する黎明であるとし、ハインリヒは太陽、又「平和の巨人」(Titan pacificus)と形容され、一度虜られた「正義」は蘇生り、凡て飢渴く者は、其の來臨によつて満足し、一方不正の徒は狼狽するであらう、と云ふ。而して彼は隸屬俘囚に呻吟してゐたイスラエルの民を埃及人の桎梏より解放し、之を幸福の國に導いた彼等の救濟者モーゼに比し、第一のモーザ(alius Moyses)とも形容してゐる。次いで皇帝ハインリヒ七世の來伊によりイタリヤ復興の時期が到來したとも(第11節)(Ep. V. 23-35)更に第五節に於て、壓制の下に憂苦する者達に救濟(vestra salus)の近づいた事を告げ、但し救ひの手が差し伸べられたにも拘らず之を迎へる準備と心構なき爲、實を結ばぬ事のなきやうにと警告する。次いで第六節に於てはハインリヒをイタリヤ人の王として歓迎し、その支配の下に服すべきやう勧告してゐる(Ep. V. 49-102)(後述Ⅱに於ける原文引用参照)。

(b) フィレンツエ人宛書簡(書簡第六、一三一年三月廿一日附)。凡ゆる公的嚮導を失つて言語に絶する悲惨な状態に在るイタリヤに今や救濟が近づきつゝある、然るにフィレンツエがイタリヤの救濟者にして正しき(イタリヤの)王たる

べかハインリヒ七世に叛き敢て抵抗するは狂氣の沙汰であるとし、速かにハインリヒの前に黙服せよ(後述Ⅳ参照)。

(v) ハインリヒ七世宛書簡(書簡第七、1311年4月17日附)。待望の救濟者の來臨を以てトスカナ・ゲルフも黨割滅の絶好の機とし、彼が一日も速に平和回復とイタリヤ救濟の大果を果せん事を熱望し、叛逆都市の征服統一、特に反帝勢力の中心たるフィレンツェ市討伐が絶対に無視し得ぬ緊急事なりとして同市を痛罵し、最後にハインリヒをダヴィッドに譬へ、彼が速かに「アリアテたるフィレンツェを打倒するな」、イスラエル人とも稱すべくイタリヤ人は救はれるであらうと叫つてゐる。

以上ダンテのイタリヤ復興思想を推測するに足る比較的顯著な材料を指摘したが、固より明確ではないにして、上述の如き Veltro 或は DXV(五百十五)を以て象徴せられるイタリヤ救濟者と關係ある豫言的詩句が以下列舉する如く神曲の諸處に散見する。

(四) 煉獄篇冒頭(Purg. XX, 10-15)。貪婪の淨罪者の間を行くダンテは、貪婪乃至教皇又は教皇廳(時にはゲルフイ)を牝狼に譬へて之を痛罵し、「汝古き牝狼よ、汝が貪慾の測り難く深きにより、他の凡ての獸よりも多く餌をあおる汝に呪あれ、おゝその廻轉に當り地上の有様を變へると信ぜられる天よ、牝狼(貪慾)を驅逐する者が先の獵犬(il veltro 101)を指す事も疑ひない處であつて、やはり救濟的人物出現への期待が披瀝されにゐるものと見てよいであらう。但し共に「来るであらう」(verra)と未來を用ひてゐるが、地獄第一歌に於ける程確信に充ちてゐない感があるのは注意せらるべである。

* Barbi, p. 535. Witte, S. 194. Philatethes, 2. S. 193, Scartazzini-Vandelli, p. 725. Vernon. Purag. II. p. 139-140 等其他の註釋者も Veltro を解し、殆ど意見が一致してゐる。

(五) 天國篇第九歌(139-142)。抒情詩人ファルコの靈聖地回復に對する教皇の怠慢を叱責して次の如く叫ぶ、「併し

ヴァティカノ及びピエトロの後に續きし軍にとり墳墓たりしその地ローマの選ばれし凡ての處は、此の姦淫より速かに解放されん」と。此處にローマの解放とは、通例墮落せる教皇廳のアヴィニヨン移轉、或はダントニによつて墮落頽廢せる教皇の代表者と目されるボニファキウス八世の死を指すものと解されてゐるが、スカルタッソイー及びカッシーニ・バルビは、美はしゃ國土を汚損した邪惡よりイタリヤを淨化すべき未來の神祕な解放者(un futuro liberatore)に就いての希望を述べたものと解し、吾人も此の解釋に賛成し度」と思ふ(Cf. Vernon. Par. I. p. 328. Casini-Barbi p. 779, Scartazzini-Vandelli, p. 735)。

(4) Par. XXII, 13-15. 土星天に於て聖ベネディクトウスが修道僧の腐敗墮落を非難した言葉に次の如きがある。「汝の叫びのうちに祈られし事を汝が悟らば、汝は生あるうちに汝の見るべく復讐を既に識りしならん。……」(天)上の劍は擊つゝと怠ならず緩ならず。たゞ之を望み或は恐れつゝ待つゆに斯く見ゆるのみ」と。之が解釋に關しては諸説あり、即ちアナーリで捕はれた際教皇ボニファキウス八世の上に降るべく恐れし復讐の豫告乃至はアヴィニヨン移轉による教皇廳の屈辱を豫想するものとし、或は神祕的な神の使者(Messe di Dio)即ち上述の DXV 又は神祕的な「獵犬」(veltro Inf. I, 101)を指すものとなす如きである(一)併し孰れにせよ何等かの手段を通して、神の正義の審判が頽廢墮落せる宗敎界に下るべしに由つて教會乃至教皇廳が廓清され、再生復興すべく事を展望したるものである事は、疑ひなし處であらう(2)。

(1) 斯く解するは古く Benvenuto, Buti 等である。但シガーハンゼヤを體裁の事實に屬するやうな「ダントニが其の實現を待望して已まね將來の事に關する所の考へてゐる(Cf. Vernon Par. II. p. 19) Casini-Barbi, Par. p. 930.

(2) 同上 Scartazzini-Vandelli. p. 861 参照。

(7) Par. XXVII, 61-63. ペトルスの靈が教皇の腐敗墮落を難じた言葉に次の如きがある。「わふふハムキ(スキピオ)により世界の光榮を衛りて、ローマに保たしめし至高なる神の攝理は、我が母ハムカに歴々に教ひ給ひよ」と。ハ

スルタジエーリのやうにモイド用ひられた語に於て地獄第一哥「猶大」の羅語の「五百十五」の羅語へ訳しの希望が、地獄篇に於けるよりも更に曖昧かつ一般的な形に於て表現されてゐる。シルヴィー。(Cf. Vernon, Par. II. p. 346. Casini-Barbi, Par. p. 989 註61, Scartazzini-Vandelli, p. 914)

(六)Par. XXVII, 142-143. 天國篇原動天に於て「トコトカラは人類の貪慾を懲謔した」として、遠か
いぢ「待望久しあ好機が廻り来て艦隊を一廻轉し、正しき針路をまつしぐらに進ましめ、眞實の成果が花のあとに
續いて現はれぬであらう」と云つてゐるが、此處に云ふ「待望久しあ好機」(la fortuna che tanto aspetto)とは、結局
「獵犬」及び「五百十五」に就いて云はれた如き或る神祕的な解放者を指すものである事は明らかである。ゲンヴォ
ームは此處に「*la fortuna* も「多くの者により期待され希望されてゐる世界の貪慾を絶滅すべし獵犬の來臨(ア)」
を指すものと解してゐる。又フィラーネスは久しく破れてゐた政教兩權の均衡を回復する改革者、特に俗界に於ける
それを指すものと解す(Philalethes, III, S. 364)。孰れにせよ私利私慾に耽り、イタリヤ墮落の因となつた教會を淨化
して本來の在るべき姿に返し、イタリヤを禍亂より救ふべき人物の出現を待望した言葉であるに纏りはない。

註(一)多くの註釋者によりハインリヒの來伊を指すとの考へられてゐるが、併し天國篇二十七歌五八行(ヨハネス二二
世敎皇位に在る事に言及)は此の句が一三一六年(ヨハネス敎皇即位)まじ書かれたかゝた事を示し、然ゆべナフリム
は一三一三年死去す。故に彼を指すものではなき。

(七) Adventus veltri, qui debet extirpare cupiditatem de mundo, qui multum expectatur et desideratur. (Cf.
Vernon Par. II. p. 364 Scartazzini-Vandelli, p. 920)

以上指摘したダンテのイタリヤ復興思想を窺ふに足る豫言的言説の解明に於て、我々は「神の使者」の如き偉大な
イタリヤ救濟者的君主の出現に期待ねだるもののが、主として抽象的道徳的には牝狼(lupa)によつて象徴される貪慾
(Cupiditas) の克服、具體的政治的意味に於ては反皇帝的白黨民主共和政府の打倒による フィレンツィア國家の質的變化

及び腐敗せる教皇廳の存在と皇帝の不在によつて墮落し汚辱されたローマの淨化復興、と云ふ點に集約されてゐる事を見出す。

即ち彼が直接イタリヤの救濟復興に就いて或は神祕的象徵的に、或は具體的明確に表白した希望的豫言的言説の解釋に於て、從來のダンテ研究者の解釋に支持されつゝ吾人が到達した結論は、結局先に彼のイタリヤ墮落觀の考察に於て到達した結論を更に確認する結果となつたのである。

V イタリヤ復興救濟者としてのハインリヒ七世

以上の考察によつて我々はダンテにとりイタリヤ復興救濟の不可缺の前提が、ローマの復興とフイレンツェの更生に在つた事を知つたのである。然らばローマの復興とは如何なる意味と内容のものであつたらうか。之はその對立的矛盾概念としてのローマの墮落なるものによつて既に抽象的には明かであるが、具體的には次の如き意味内容を有つものとなねばならぬであらう。即ち、先づイタリヤ人の現實的政治的救濟を擔當すべき現實界最高指導者たる皇帝、然も皇帝本來の使命を自覺し之を遂行すべき眞の皇帝がローマに常住し、之によつて全イタリヤを統轄する統一政權を樹立すべき事、次に精神的救濟を擔當する宗教界最高指導者たる正しき教皇の存在乃至彼が佛王の傀儡たるバビロニヤ幽囚の身より解放されローマに歸還し、之によつて從來の汚辱を拂拭し、人々が據つて以て永遠の生と福祉とを確保すべき精神的倫理的根據を樹立する事、第三には、之等政教兩元首が各其の職權の限界を守りつゝあたかも車の兩輪の如く相提携する事であつた。即ち斯る狀態がイタリヤに存在してこそ初めて、先述の如き墮落頽廢の諸相は除去され、イタリヤは本來の輝かしき狀態に復歸すべき筈のものと考へられたのであつた。斯くて茲にイタリヤ救濟復興の理論的構造は明かとなつたものと云へよう。併し「帝政論」及び「靈宴」に於て、思辨的觀念的に説かれた世界秩序の存在様式、或は「神曲」「書簡」「俗語論」等に於て、神祕的豫言的言説により抽象的に待望された、イタリヤの

救濟復興は、之が思辨的生活(Vita contemplativa) に於てではなく、現實生活(Vita activa) に於て、現實の問題として採り上げられるに及んで、一層具體的に明確となるべきは當然であると云ひ得る。斯くしてこゝに我々はドイツ國王ハインリヒ七世の出現とその來伊が、ダンテのイタリヤ復興思想形成上有する意義に就き新たに考察せねばならない。蓋し彼はダンテが久しくその出現を待望してゐた皇帝像に合致し彼の要望に答へる資格を具備した者として出現したと考へられるからである。我々はそれを次の諸點に見出す事が出来ると信ずる。

第一にハインリヒはシュタウフェン朝最後の皇帝フリードリヒ二世の死後(一一五〇年)、約半世紀間正統なる皇帝を缺いたのち最初に現はれた正統の皇帝と解せられる事である。ダンテは神曲制作に着手した年代とされる千三百年の頃ローマには皇帝教皇共に不在であつたと考へてゐる。蓋し彼は當時の教皇ボニファキウス八世がペテロの位を僭稱せるものと考へ、少くともキリストの眼より見て、教皇の座は充されてゐなかつたものと信じてゐたからであり。(天國篇第二十七歌、一一一一四行、ペテロの言葉)、又同様に帝位はフリードリヒ二世(一一五〇年歿)を以て終り、だとへ其後ルドルフ及びアルブレヒトがドイツ國王に選定されたにせよ、孰れもイタリヤに來らず、従つてローマに於て戴冠されてゐないが故に、帝位も亦充たされぬものと信じてゐた(Conv. IV, iii, 39, Par. III, 120; Purg. VI, 89; Ep. VI, ii, 11 sqq.) からである。斯くして一一〇八年ハインリヒ七世が新たにドイツ國王となり、一一一〇年戴冠の爲イタリヤ遠征をなすに及んで、ダンテは彼こそ半世紀の空位の後に、はじめてローマに於ける帝座を充たす最初の正統なる皇帝と考へたのであつた。彼がハインリヒに就いて用ひた表現例へば「……神聖尊嚴なものにしてカエサルなる」とも仁慈なるヘンリクス」(Ep. V, 82) 其他(一)は亦以て以上の事實を證明するものと云はねばならない。而して第六第七書簡に於ける「正統の王」「正しき王」表現使用も彼を正統なる皇帝と認めた證據と云ひ得るであらう(尙VI(9)項参照)。

第二に彼のドイツ國王選立に於てダンテの要望を充たすものがあつたと考ふべき充分の理由が存する事である。當時ヨーロッパに於ける政情は、シュタウフェン朝の没落により獨佛勢力の交替轉換期であり、その勢力關係はそのまゝ、

イタリヤにも波及して、フランスの前衛勢力たるナボリ王家は、フイレンツェの財力と結んで教皇廳を懷柔し、ドイツ勢力の驅逐によつてイタリヤの支配權を掌握せんと企圖した。然も國力の増大を誇るフランスは教皇廳のフランス傀儡化(アヴィニヨン出囚)の成功に乘じ、遂にフランス王族によるドイツ國王位の篡奪をも企てるに至つた。斯る微妙な國際的勢力關係推移の際起つたハインリヒのドイツ國王選立は、フランスによるヨーロッパ制覇の野心を一應挫折せしめた意味のものであつた。少くともダンテにとり斯く解せられたであらう事は、同時代のイタリヤ年代記家ディノ・コムペーニ及びジョヴァンニ・ヴィルラーニの記錄に徵しても、推定する事が出来るであらう。

ハインリヒ選舉の動機に關し、ディノ・コムペーニはフリードリヒ二世の死による皇位の斷絶と共にイタリヤに於ける帝國の聲望並びに教會勢力も衰微したが、それはボニファキウス八世を憤死せしめるに成功し慢心した佛王が、勝手に樞機官を任免し、暴力を以て教皇を抑留、教會を壓迫したからであると述べ、神が之を憂へ教皇樞機官の注意を喚起し、佛王に對抗して教會を防衛する爲に皇帝を立てる事となり、其の資格に缺くる處なきハインリヒを選んだと述べてゐる⁽²⁾(Cap. XXIII, p. 302)。又ヴィルラーニは更に詳細にその動機に關し記述してゐる。即ち佛王フィリップ美王年來の希望は教皇教會の支持により、王弟シャルルを「ローマ人の王」たらしめるに在り、ドイツ國王(アルブレヒト)死後選帝侯間の紛争に乘じ、かつて彼の後援によつて教皇位に即けたクレメント五世の誓約もあり、ドイツ人による國王選舉が決定せぬ以前シャルルを推舉せしめんとして、アヴィニヨンに軍隊を派し、シャルルのローマ王選舉とその承認とを要求せんとした、而るに教會が完全に佛王家に屈服するを喜ばぬ神の思召により、此の陰謀が教皇に漏れ、斯くて教會の自由が奪はれる事を識つた教皇は、プラトの樞機官と諮り、彼の意見によつて佛王の要求以前にドイツ國王選舉を完了すべき事が唯一の對策と考へ、斯く手配する事によつて何等の紛争もなくハインリヒの選舉が決定したと述べてゐる⁽³⁾(Cronica, VIII, 101; Tomo III, p. 184-188)。

以上二つの記録は佛勢力による帝位篡奪の企圖を傳へるに一致して居る。但し孰れもイタリヤ人のものであり、フ

テンス側よりの記録を照合せぬ以上は、正確なる事情は推測し得ぬにせよ、兎も角同じイタリヤ人たるダンテにとつても、佛王フィリップの野心が嫌惡すべきものと考へられたのは當然であつた。従つてドイツ國王を以て皇帝の正統と考へ、又教皇廳のアヴィニヨン移轉、又教皇の傀儡化を以て、ローマの墮落と考へるダンテが、佛王の野心的企圖を破碎し斷乎之に對抗して、帝位を正統なる者に齎らすに力めた教皇廳の處置は、歡迎すべきものと考へられたに相違ない。而して又此の際にダンテの理想とする教皇と皇帝との提携と云ふ狀態が、たゞへ瞬時にもせよ實現した事は、彼を狂喜せしめずにはおかなかつた筈である。斯くてハインリヒ七世の選立は、佛王の野心の打破により地上の正義が樹立され、又ダンテが年來渴望してゐた世界秩序の権軸としての教政兩君主の提携結合が實現したと云ふ意味に於て、ダンテの要望を充たしたものと見做すことが出来るであらう。

第三にハインリヒがダンテの期待した平和の皇帝の属性を具備し、従つて彼にとり最も好ましき個人的資質を有つてゐた事、換言すればアウグスティヌス流の中世的理想君主像たる「正しき王」(rex iustus)⁽⁴⁾に合致するものであつた事である。彼に對して用ひられた最高の頌辭と敬稱とは、詩人慣用の空虚な修辭的美辭令句に外ならなかつたといふ單純な意味のものではなかつたであらう。何故なら少くとも當時のイタリヤ人はハインリヒについてダンテと同様の解釋を下して居り、そこに彼の主觀的解釋を超えた客觀的な妥當性が認められるからである。例へばティノ・コムペーニは、新獨帝選立に於ける候補者の資格に就いて述べた際「そは公正にして且つ賢明・強力なる教會の子、信仰の愛護者たるべき人物であつた、而して彼等は斯る偉大な名譽に價すべき者を求むるに及び、久しう宮廷に住まい、高貴の出にして行正しく、名聲あり、甚だ廉直、戰に臨んでは勇敢且つ血統正しく、卓越せる才幹と度量宏大なる賢明の人物を見出せり、之即ちドイツ國ライン河谷のルクセムブルグ伯ハインリヒなり」(Cap. XXII, p. 302) といひ、更に王の超黨派的態度を賞讃し(Cap. XXVI, p. 305)、又皇帝としても職責の遂行に熱心であつたのみならず、度量宏大寛厚の心を有す(Cap. XXII, p. 305, XXVII, p. 306, XXVIII) 斯くて平和的皇帝としての資質を充分具備してゐ

た事實を指摘し、彼も亦王によるフィレンツェ政府の打倒懲罰を期待してゐるのである⁽⁵⁾。固よりディノがダンテ同様
フィレンツェ黒黨民主共和政府と相容れず、爲にハインリヒに傾倒した事は明かであつたとしても、彼と反対黨たる
ヴィラーニがハインリヒの高邁な資性を率直に認め、ディノ同様の記録を殘してゐる事は注目されねばならない。即ち
「彼は賢明にして公正、仁慈、又戰に臨んでは剛毅にして果敢、然も有徳にして寛厚なりき。而して血統上所領小な
りと雖も氣宇大にして畏敬され恐れらる。若し更に長生せんか最も偉大なる事業を果せしならん。」(Cronica XI, Cap.
1. Tomo IV, p. 56)と述べてゐるのである。以上同時代の著名な年代記者一人の記録のみにより推論する事は、固よ
り不充分の嫌あるにもせよ、相互に相反する黨派的立場に在る兩者が殆ど同一の觀察を下してゐる事によつて、少く
とも當時一般にハインリヒが皇帝たるにふさはしき人物であつたとの印象を與へたものと解する事は決して不當ではないであらう。従つて彼の出現に於てダンテがイタリヤ復興の可能性を見出した事も、必然的な結果であつたと言は
ねばならない。

第四にハインリヒの皇帝選立に際して彼に期待されたものが、其後彼の現實の行動に於て事實として證明され益々
ダンテの志向方向に合致した點を指摘し得る。即ちハインリヒ七世は即位後直ちにイタリヤに於ける紛亂の除去によ
る平和招來⁽⁶⁾の爲、且つ又ローマに於ける皇帝戴冠の爲の準備を急⁽⁷⁾め、而して事實、一三一〇年にはすでにイタ
リヤに入り、先づミラノに於て鐵の王冠を戴いて、イタリヤ王たるの資格を取得⁽⁸⁾し、次いでトスカナ同盟と提携し
てローマに反ヘインリヒ大會を開催し彼の戴冠を阻止せんとしたロベルト王の抵抗を排除し、ローマに於て戴冠して
王(Villani, IX, Cap. 43)而して其後彼が最も力をつくした事業は、フィレンツェの攻略と云ふ事であつた。然も彼の意
圖する處が先にも述べた如くフィレンツェ市の絶滅そのものではなく、その反皇帝的性格の變化更生により、フィレン
ツェをローマと共にイタリヤ救濟復興の絶對必要な要件たらしめるに在り、全くダンテの考へるイタリヤ復興の要
件と合致するかに見えたのである。ヴィラーニがハインリヒの對フィレンツェ態度を述べて「余の希望は單なる二黨の

みならず、全フイナンツ人を余の忠實なる臣民^{レシ}し、かの都市を余の財寶 (nostra camera) 及び我が帝國中最の高貴なるもの (la migliore di nostro imperio) もやへとせんじゆつた」と^レWitt (Villani, IX, Cap. 7, Tomo. IV, p. 8-9) 事は、之を證明するに得るであら。

斯くしてダンテが要望するイタリヤ救濟復興の前提條件たるフイナンツ共和国の性格變化と更生、及びローマの淨化復興と云ふ課題の解決に全力をつくすかに見えたバインリヒ七世に於て、ダンテがイタリヤ復興救濟者の現實の像を見出した事は、^カと當然と云ひ得る。從つてハインリヒのイタリヤ遠征が彼のイタリヤ復興思想の生成發展上に占める意義蓋し顯著なるものがると見做^ルれるを得ない。即ち「俗語論」及び「饗宴」等に於て、地理、人種、言語、法律、慣習に於けるイタリヤの統一性を認識する事により、彼の把握し、規定した新しきイタリヤ概念としての單一文化共同體(の)は、たゞ短期間なりとは云く、凡の事態乃至條件が、彼の構想するイタリヤ復興思想實現にとり最も惠まれた一一〇八年より一一一一年に至る時代、而して特にハインリヒ七世の來伊・ローマに於ける戴冠の事件を契機として、今も單一政治的共同體の構想にまで發展したるのである。

註 (1) 「麗高なるアリ^ヒ」(Par. XVII, 82)、「汝の花婿、世界の慰藉、汝等人民の光榮、神聖尊嚴なる者にして又カエサルだぬレアル^レ潔のくンラク^ベ」(Ep. V, 82)「世界の王にして神の司たるローマの君主」(Romanus princeps, mundi rex, et Dei minister, Ep. VI, 31-32)、「ローマの家産を衛る者、神聖にして凱旋者たるくンラク^ベ」(Ep. VI, 180-181)、「最^ム神聖なる凱旋者、また唯一の君主、神の攝理によるローマ人の王として亘久のトウダヌラベたる君主^{クハニベ}」(Ep. VII, tit.)、「世界唯一の支配者」(praeses unicus mundi, Ep. VII, 125-126)、「最^ム卓越せる君主」(excellens rex, Ep. VII, 125)、「正義の王」(iustus rex, Ep. VII, 90, Ep. VII, 11-12)、「正統の王」(legitimus rex, Ep. VII, 167-168)等。

(61) Cronicca Fiorentina di Dino Compagni, Delle cose occorrenti ne' tempi suoi. (Biblioteca Classica Economico-
mica) ルトキスムスコレ用ひ、羅ムコレ Temple Classics の英譯、及び Ida Schwartz の翻譯を參照した。

(62) Cronicca di G. Villani (A miglior lezione ridotta coll' aiuto de testi a penna, Firenze 1823 8 Tomi) ルト

キヌエとして用ひだ。

- (4) Vgl. E. Bernheim, Mittelalterliche Zeitanschauungen in ihrem Einfluss auf Politik und Geschichtsschreibung. Teil. I. Die Zeitanschauungen. 1918, 4655.

(5) 「…あゝ邪智と惡錢によりて全世界を墮落せしめ汚せし不正なる市民よ、汝等こそは世界に凡ゆる惡習を瀰漫せしめし輩なり。されど今こそ世界は汝等に背を向け始めぬ、即ち皇帝はその軍隊も汝等を海陸より攻め陥すべければ」と叫んでゐる(XLII, p. 318)。

(6) 「彼の生涯は遊興や狩獵その他の娛樂に在るのではなく、絶えず會議を開き町々に代官を任命し、互に鬭ひ合ふ人々の間に平和を齎らす事に費された」 ト々(D. Compagni, XXVI, p. 305. Villani, IX, Tomo IV, p. 89)。

(7) 「彼は選立され承認されたるを以て山脈を超えて、蓋し先に翌八月戴冠の爲來らん事を誓約し、然も彼は眞の君主の如くその誓約を守らんと意圖せしが故なり」 ト々(D. Compagni, YXIV, p. 203)。

(8) Villani, VII, Cap. 101, 102. 尚、鐵の王冠の意義に關しては拙稿「ダンテのイタリヤ國家觀一考」(史林第11七卷第四號) 參照。

(9) 此の問題に關しては拙稿「ダンテのイタリヤ統一觀」(西洋史研究第十四輯) 參照。

VI 結

前項の最後に言及したダンテの單一政治的共同體の構想は、之を本稿の序と關係づける事により、我々は結論を導き出しう度いと思ふ。上述の如くダンテは古代ローマ帝國を復興する河をイタリヤの原初的理想國家と仰いだ。従つてハインリヒの來伊と共に實現の可能性が見えたイタリヤの復興は、彼にとり古代ローマ帝國的體制の回復、即ちイタリヤのみならず其他の諸國民をも包含する超國民的普遍的國家所謂 Imperium(帝國)でなければならぬ筈である。然るに彼は上述の如く元來イタリヤが地理、人種、言語、法律、慣習上に於て固有の統一的完結體をなす單一文化的共同體として把握し、その地位を規定して「ヨーロッペの最も高貴なる地」(Europae regio nobilissima) (De Mon. II,

「光」(grationum lumen rationis) (De Vulgari Sloquentia, I, 18,⁵¹) によつて統一されてゐると説き、「君主による政治的統一の缺如を遺憾としてゐる。

エルコーンは此の文化的共同體としてのイタリヤを直ちに同時に政治組織なりと考へ、之を「イタリヤ王國」(Regnum Italicum) にあると斷定し、然も之を全く近代的國民國家の如く解した。又ランドーニヤもダンテの政治思想にイタリヤ國家の構想の存在を認め、之を中世前期には實在したが當時は事實上既に亡んだも同然であつた歴史的國家としての Regnum Italicum の存續乃至復興と解し、更に最近ではミケーレ・バルビも亦「イタリヤ國家説」を支持し、之を自明のものとして認め、たゞ之をエルコーレの如く直ちに政治的に統一せる近代國民國家と見做す事に反対してゐる。然るに一方之に反対の見解もあり、サムナーは右のエルコーレの所説を詳細に検討し痛烈な批判を加へ、徹底的に反駁してダンテに於ける「イタリヤ國家」觀念の存在を全く否定し、更にソルミも嚴密な法制史家の立場より同様の結論に達したものと見られる(1)。

勿論ダンテの構想するイタリヤ國家を餘りに近代的に解釋したエルコーレの所説は承認し難いが、同時に詩人たるダンテが比喩や象徴其他文學的形式に於て表現した政治的願望を、中世か近世乃至はルネサンスかといふ如き單純な範疇に分け、餘りに法理論にとらばれ散文的に解釋したサムナーの解釋も我々としては承認し難いのである。前述の如く全イタリヤ諸王のみならずローマ元老院議員、公侯伯其他一般人民に對し「凡てイタリヤに住む者等よ目醒めて汝等が王の御前に立て (assurgite regi vostro)」汝等の命に服するのみならず、また自由の民として、彼の指導に従ふべく定められ居ればなり」(Ep. V) と叫び、ダンテが熱狂して迎へんとした「王」は、やがて從來皇帝がローマ戴冠に先立ちミラノ乃至モンツァに於てイタリヤ王位の象徴たる鐵の王冠を戴くといふ傳統の慣習的行事を實行してゐる。而して此の戴冠後ダンテがフィレンツェ市民宛書簡とハインリヒ宛書簡に於て、彼を「正しき王」「正統の王」

(iustus rex 又は legitimus rex) 或は「至高の君主」(excellentissimus princeps)と稱し、特にフィレンツェがナポリ王と結託して、ハインリヒに反抗したのを「正しか王を侮り氣も狂ひて、我が王ならぬものを王として恥ぢず」と痛罵してゐる(Ep. VII, 167-170)事實を考へ合す時、ハムに表現された「汝等の王」乃至「正統の王」が、前述「俗語論」に於て、イタリヤの統一的文化共同體に缺けてゐると云ひ、之を遺憾としてゐる一君主(princeps)と、無關係であるとは思はれないものである。従つてハインリヒの來伊に際し、彼が熱狂的にその政治的復興を期待してゐるのは、「帝政論」(第一篇)や「饗宴」(第四篇第四章)に於て、人類共同生活に就き論じ理想的在り方とした唯一のモナルキヤ即ち普遍的世界帝國ではなく、より狹小な個別的國家共同體に近いものであり、同時に又その君主像は超國民的世界帝國のそれではなく、何等か個別的イタリヤ的君主のそれであつたと推測されるのである。然もそれはペヴィヤを首都とし北伊の小地域に限定された過去實在の Regnum Italicum 即ちランゴバルド＝カロリンガ的傳統のものではなく、又普遍的世界支配的君主に非るイタリヤ王的性格を有つ皇帝により支配される如あるのであつたと考へられる。レオナルドの所謂 Regnum Romanorum(ローマ王國)の如かるのであつたであらう(Studi Danteschi, Vol. 12, 1927, p. 113-115)。

それは北伊ランゴバルド・カロリンガ的 Regnum Italicum の全イタリヤ的規模への擴大であり、又普遍的超國民的ローマ世界帝國のイタリヤ的規模への縮小を意味する。勿論我々はエルコーレの如くダンテの構想する國家が「ヨーロッパ」なる言葉によつて表現される普遍的世界帝國より劃然と區別された近代的國民國家であつたと結論する者ではない。Imperium 概念と Regnum Italicum 概念との間の動搖、現代人につては理解し得ぬ外國人君主支配下の國民國家といふ矛盾を意識せぬ彼の政治觀の過渡性、即ち彼にとり外部的政治的諸情勢の最も有利に展開した際、斯る外國人君主をイタリヤ國民的君主の如きものとして把握した點、換言すればイタリヤ化といふ形式に於て普遍的ローマ世界帝國思想より、不明確ながら萌芽的イタリヤ的國家觀念を胚胎分離せしめたと考へらる點、其處にこそ彼のイタリヤ復興思想の有つ獨自的意義を認め度いと思ふのみである。

シニナイダーは古代文化の因子を内包するローマ思想は中世的ラティンディヤ(太所有地)の瘴氣が新文化の擔ひ手たるべき近代社會の萌芽を一切殺して了つた、世界教會の地盤に於ては發芽せず、却つて新たに開墾された處女地即ちイタリヤに於てたゞひとり近代的市民社會の成立を見たロムバルデヤ・トスカナ地方諸市に於ける經濟的社會的發展の地盤にのみ發芽し生長し得た、從つてルネサンスはローマ思想とロムバルデヤ市民文化との綜合である、と云ふ。

即ちブルクハルトがルネサンスを、イタリヤ國民精神と新たに認識された古代との共同作用より發生した文化運動と解した際に於けるこのイタリヤ國民精神の擔ひ手こそ一部トスカナ地方をも含むロムバルデヤ新興都市市民階級並びに自由農民層であつた⁽²⁾と考へてゐるのである。此の事は又一方より考へれば、ルネサンスが單なる古代からも、又單なるロムバルデヤ市民精神からも生れなかつた事を意味する。兩者の結合よりのみ新時代を劃する文化的創造運動が生れ得るのである。ロムバルデヤ市民精神は反外國支配即ち反獨反皇運動の地盤といふ意味に於て、イタリヤ國民感情國民意識檣頭育成の地盤たり得る、併し此處に生れる愛國心は狹隘な地方的郷土的割據主義のそれであつて、之等全部を蔽ひ全イタリヤ的なものに統合する統一的要素がない。こゝに缺けた統一的要素と新文化の方向を規定する文化の種子を提供したものこそ、ローマ思想に盛られた古代であつたと考へられる。

斯く考へれば更生せるフィレンツェと復興せるローマとの結合を以てイタリヤ復興の不可缺の要件と考へ、而して熱烈なローマの思想の信奉者であると同時に、トスカナ新興都市フィレンツェ市民階級の一人であるダンテによつて、兩者結合の媒介的意味を有つイタリヤ復興思想が懷かれたと云ふ事は、決して偶然とは云へない。然も政治理論としては遂に明確な表現と體系を形成するに至らなかつた彼のイタリヤ思想は、文學的表現に於て、即ち「神曲」に於て⁽²⁾の目標到達し得たとも云ひ得るのである。蓋し「神曲」は市民の日常語たる俗語、然も彼の母國語たるトスカナ語を基準としながらも、之を超出し彼固有の詩人的美的評價に基づき全イタリヤ各方言より選擇され彫琢されたとの意味に於て全半島に共通のいはゞ標準的口語、を以て書かれ、其の意味に於て正しく一個の統一的イタリヤ文化共同體の

小舟曲を形成したるかむじゆ。而して又此處にイタリヤ・ルネサンスにての彼の歴史的意義があり、あらわしの意義の限界の存すると既べのだ。

(1) Francesco Landogna, "Imperium" e "Regnum Italicum" nel pensiero di Dante, 1926; Michele Barbi, "L'Italia nell'ideale politico di Dante" (Studi Danteschi, Vol. 24, 1934); Sumner, "Dante and the Regnum Italicum" (Medium Aevum, Vol. 1, No. 1, 1932; Solmi, Studi Danteschi, Vol. 12, 1923. に於けるハシードヤの軸の概説紙々 Parodi, L'ideale politico di Dante, in Dante e l'Italia, Fond. M. Besso, 1921. Solmi,

"Il pensieropolitico di Dante" (La Voce, 1921) Freole, Il pensiero politico di Dante, 1927 や等の著書論文はカルロ・カナルーリヤ・カルナーラ等の引用された内容による。但し等諸論者の見解の内容及びシグヌス・イタリウムの問題に關しては拙稿「ダントンのイタリヤ國家觀」考—Imperium と Regnum Italicum の問題に就いて(史林第11十七卷第四號)参照。

(2) F. Schneider, Rom und Romgedanke im Mittelalter, S. 155, S. 210, S. 215. 特に第十一章「イタリヤ國民感情のローマ思想との融合」の項参照。但し此の書は大體全篇ローマ思想との融合に於けるイタリヤ國民精神發生の基礎としての中央ヨーロッパ要素の意義重視を以て貫かれである。